

恐山信仰と地獄巡り

小山 隆秀

(弘前大学客員研究員)

毎年11月は、全国的に有名な霊場恐山（おそれざん）が閉山シーズンを迎える季節だ。霊場は翌年4月まで深い静寂に包まれる。かつて「宇曽利山（うそりやま）」と呼ばれた恐山とは、特定

の山ではなく、青森県むつ市山中にある中近世以来の霊場一帯を意味する。

伝説によれば恐山は、9世紀に天台僧円仁が開き、16世紀中期に曹洞宗吉祥山円通寺（むつ市）が再興した。17世紀に釜臥山（かまふせやま）嶽大明神を祭祀する場として朝廷から認められた。

18世紀半ばから地藏信仰が盛んとなる。境内には円通寺末寺菩提寺や円仁作と伝わる延命地藏尊像を本尊とする地藏堂があり、様々な地獄や浄土が再現され、死者供養、病氣治癒等を祈る参詣者や湯治客が増加した。

19世紀には、大坂、江戸、蝦夷地等を往来する商船の船主達による寄進や海上安全祈願が盛んとなり、十返舎一九「恐山参詣道中記」出版によって、宗教的要素と観光的要素を持つ全国的に有名な霊場となる。

近代になると、恐山信仰を支えていた海上交通と交替して、1921（大正10）年に鉄道「大湊線」が全線開通すると、鉄道網から離れた恐山は再び地域の霊場へ戻ったという。しかし恐山大祭にイタコ達が集まり口寄せを行うようになると、1950年代のマスメディアによって「恐山Ⅱイタコ」のイメージが普及した。

20世紀以降は、総門から本尊地藏堂までの空間が、曹洞宗寺院の死者供養空間として整備され、南西部は様々な地獄がある民間信仰中心の空間となった。その地獄には全国各地から参詣者があり、南部地方の各集落では「死ねばオヤマ（恐山）さ行ぐ」という伝承がある。

その恐山地獄巡りの歴史には、これまで不明な点が多かった。しかし近年、青森県立郷土館の研究により江戸時代の実態を記した史料が明らかになった。1798（寛政10）年に菩提寺で案内役をしていた無看という人物が記した「恐山境内案内演説」という史料である。

それによれば当時の地獄巡りは案内人が導き、常灯明（じょうとうみょう）、慈覚大師御庵宝、なまこ地獄、はし塚、修羅道（しゆ

らどう）、鍛冶屋地獄、九戸地獄、新地獄、金掘（かなほり）の地獄、胎内くぐり、五智の如来、鬼石（おにいし）、畜生道、三途橋、法華地獄、極楽浜、漁師地獄、作人（さくにん）地獄、磨屋（とぎや）の地獄、血の池、八万地獄、賽（さい）の川原、糺屋（こうじや）地獄、博奕打（ばくちうち）地獄、塩屋（しおや）地獄、うまつめ地獄、酒屋地獄、剣（つるぎ）の山、座禅石、おなめ（なめ）の地獄、豆腐屋地獄、酒屋（あぶらや）地獄、舍利浜、慈覚堂、釜臥山、林崎明神、無限地獄、護摩壇（ごまだん）石、靈飯石（みたまめしいし）、小鍋焼（こなべやき）地獄、蚕（かいこ）地獄、山伏の地獄、紺屋地獄、無縁堂、石仏薬師如来、地藏菩薩御堂、絵図守札の所、の順に回り各所で解説があった。これは明治初年や現代の恐山の地獄の内容とは少し差異がある。

すなわち恐山の地獄は、各時代の世相や民衆の宗教意識に対応して変化し、熟成されてきた。今後その過程を明らかにしていきたい。

参考文献：佐藤良宣・小山隆秀「恐山史料の再発見」（『青森県立郷土館研究紀要 第46号』同館、2021年）

恐山境内=1964(昭和39)年7月20日・青森県史デジタルアーカイブスより

